有職抄

齊服　禮服　車輦　具足

七　終

稱意館藏本

ワ 3
6330
6

宮内省圖書寮

有職抄巻之第七

斉服

大嘗會豊明節會等ニ小忌ノ袍ヲ着用ソノ躰朝服ノ如シ但シ身ハ一幅ナリ狩衣ノ寸法ヲ用ユトカ但前尻朝服ノ如シ白キ布ヲ形ハリニメ藍ヲヌリ後ニ堂クトカ、裏ナシタヽ一重ナリ文小草梅柳水早蕨蝶小鳥等ナリ摺様漬飲ヲ布ニツヽミテコレヲフムソノ後形ノ上ニ山藍ノ葉ハカリヲ取集テコレヲ摺ル墨ヲ以硯ヲ摺様ニスル

去水 五味均平蔵

ヨシミエ侍ルナリ

諸司小忌

ウ3
6330
6

土御門大納言抄ニ云予建暦ノ度諸司ノ小忌ヲミルニ
麻布麁悪ノモノナリ身ニ二幅袖左右各一幅又ハ四幅ナリ
低穏ヲ以テコレヲトツル前ノ方ニ両方引合テ帯ニハサ
ム後ノ左ノ方ヨリ上ニ手ニ引トホス今度通氏朝臣モ
チユルハ白キ布美麗ノモノヽ形ノコトクコレヲ摺ル或ハ後ノ
方帯ノ下ヨリ引トホシテ三角ノ中ニコムルトヽ云ヽ

赤紙

濃キ并ニ蘇芳ナリ細ク畳ヲ帖ム長サ一丈四五尺ト云ヽ
下繪押昊ナトアリ或ハ所ヽニ押昊斗有又羅ニ泥繪ヲ
モカク或縫物ヲ用ヒタルトミエタリ右ノ肩ニトチ付ル舞

人ハ左ニ着ル肩ヲスクニヨリテヽ

日蔭

細キ糸ヽ但之或ハ分但モ有青キ糸或ハ白キ糸ヲ用ユ長
サ一丈二尺計トヽ云ヽ所詮糸ヲアケニキニノ左右ハ筋或
ハ十二筋冠ノ左右ノ角ニ一トヒテ結ル丁ヽ蔓ト云草ヲ神
代ニカツラニシタル丁日本紀ニミエタリ土御門大納言抄
ニ平治ノ秘記ニ曰日蔭蔓冠ノ巾子ニ結テ括ノ纓ノ上ニ
有同ク治リ白地仕年ハ紅梅ヲ用ユ又白梅交ル又菊木ト
ヽ細キ糸ヲ以テ蔓ヲ付ル也冠ノ上ニ結フ前方ニ筋
後ノカタニ筋後ノカタニ筋垂ルナリ

心葉

同記ニ曰心葉梅花三寸計也三金ノ枝ニ梅花貫ヲ付ル若
ハスハら貝ノ破レ或結花紅梅白梅活ニホニ煩ル前ノ方ニ
蔓ニ付テ巾子ニツヘテコレヲ立ル左右各一枝ヤリ或ハ上猶
ニ掛テ四枝是ヲ立ルトミエタリ

半臂　下襲　衫衣　袍　単衣　表袴

右尋常ノ物ヲ用ユ天子ハ猶半臂下重モ縫殿寮ヨ
リ献スル処　斉服ヲ着御ノ由見エタリ

天子小忌着御

法性寺摂政ノ記ニ曰縫殿神夏ノ御服ヲ献ス御袍闕腋

但廉恵ノコトシ甚シ法皇仰ニイハク先例如此トミ着御
通季卿コレヲ奉仕ス袍半臂下重等ヲアラタメラル
自余ハ帛ノ御服ノ貫ヲモチヒ結フトミ正慶元年十一
月十三日光厳院ノ宸記ニ曰次ニ斉服ヲキル権大納言
コレヲ奉仕ス袍ノ上ニ小忌ヲツクル袍并ニ半臂ハカリ斉
服ヲモチユ自余本服ヲキル次ノ幘ヲ供ス冠ノ上ニ結ハレ
ム追ニ曰安ヲカシカフルニ猶下重ニヲヒテハ斉服ヲモチ
ユ（干支之アラタメナル誤ノトミ）

臣下小忌着用

仁平三年十一月十九日兼長裝束青スリノ黒キ半臂

下重表袴紅梅ノ袍三領濃キノ衣濃単衣紅ノ大口日
蔭冠ニ付ル赤紐右ノ肩有文ノ玉帯魚袋飾釵付地ノ平緒
等ノ赤剋兼長小忌ヲ着用スルノ由又左府ノ記ニミエタリ

挿頭花

カヲニテチヒサキ花ノ枝ヲ作リテ冠ニサシ侍ルヲ天子ハ冠
ノ左ノ方ニサシ臣下ハ右ノ方ニサスナリ
久寿二年十一月廿四日法性寺摂政ノ記ニ曰次ニ内弁座ヲ
立御挿頭ヲ取テ御冠ノ左ノ方ニ立ル件ノ花銀ヲ以テ是ヲ
作ルトミエ
四慶元年十一月十三日先蔵院ノ宸記ニ曰挿頭花銅ヲ
以テ是ヲ作ルトミエ

天子ノ挿頭

長元ノ度櫻ヲ用ヒラルヽ由ミエタリ
保安四年十一月法性寺摂政ノ記ニ曰挿頭大臣藤ノ花納
言梅或ハ櫻参議欵冬トミエ
或記ニ曰親王梅大臣藤納言櫻参議欵冬トミエ

舞人

挿頭

臨時ノ祭禁裏ニテヒニテ是ヲ玉フ稲荷ノ御幸行啓ニハ社頭
ニテヒニテ是ヲ玉フ或ハ仙洞ニテヒニテ是ヲタマフ行幸ノトキハ

社頭ニテヒテ星ヲ面トシエタリ

小忌

小忌ノ文竹桐夏ハ蛍ヲ冬ハ星ヲ堂ノ多ハ舞人ヲ奉ルノ時拜領ストシエタリ年少人ハ或ハ私ニ星ヲ個テ着用スト云ヘ

赤飯

大略公物ヲ用ユト見エタリ

仁安二年十一月廿一日賀茂ノ臨時祭同三年四月二日右清水臨時祭等ニ内大臣通親拜領ノ小忌ヲ用ユ但頭紙ヲ括改トヘ

仁平元年十一月二十五日臨時祭ノ舞人少将隆長青摺私

ニ星ヲ個ヲ當色ノ頭紙期ニアハサルユヱナリ赤紐花ニ着ル螺鈿有トシエタリ

摺袴付下袴津賀利

同公物ヲ以テ星ヲ着用ス但下袴津賀利絲用意スヘシト云ヘ

仁安二年十一月廿一日賀茂ノ臨時祭同三年四月三日石清水臨時祭内大臣通親舞人ノ時公物ヲ用ユ但三人下重私ニ用意ス拜領ストノヘ氏襲袴ハ星ヲ不用近年人ヘ狩袴ヲ用ユト云ヘ津賀利但私ニ星ヲ儲ノ青白二筋ヘ

下襲付半臂

用公物ヲ用ユトミエタリ但私ニ是ヲ調ル諸例アリ　二藍ノ
下重半臂ナリ

布衣　単衣
尋常ニ支ナシ

糸鞋
織ノ上是ヲ着ケ着ナカラ堂上ニノボルニ憚ナシ参入ノト
キ深泥セハ糸鞋ヲ着ナカラ浅沓ヲ着トヽ云ク

仁平元年十一月十日春日祭舞人ノ装束白半臂（儺ノ単袴ノ下ニ重）
白下重（儺ノ単張袴）　摺袴濃下袴（以上公物ヲ用フ）　蘇芳ノ布袍衣単
衣布帯野剣（倫ノ瓦靴）　韋襪糸鞋　冠纓鞭（腰ニサス以上私ニ是ヲ設ク）

浄衣
倫布両様也仙洞着御ハ諸社ノ遥拝熊野御幸ノ神夏
ハ下ナリ武家例ハ八幡参詣其外諸社参詣等ニ見エタ
リ摂関諸家ハ是ニ用ヒ衣単等ヲ重ル夏狩衣ニ用ヒ
仙洞着御例
建保二年三月六日後鳥羽院ノ宸記ニ曰年一熟浄衣ヲ
着テ倫明門院女院ノ熊野精進ノ屋ニ幸ス殿上人右少
将実忠右兵衛佐忠嗣狩衣浄衣ヲツクル精進ノ屋ニ
ヒテシヤウランスヘシ仍テカクノコトシ醫王直垂ヲツケテ
庭従スト云ヽ

永仁七年四月廿四日新院八幡ノ御幸ニ浄衣ヲ着御トゝ、
永徳三年三月朔日崇光院ノ宸記ニ曰浄衣ヲ着テ神ヲ拜
ストゝ

摂家

正和三年十二月十九日後福光園院摂政ノ記ニ曰神木六条ト
ノ二入御仍テ浄衣ヲ着テ中門ノ切妻ニ下リテ六条殿ノ方ヲ
拜ス両殿再拜トゝ、
康正二年二月八日大塔金剛院浄衣ヲ着庭上ニ下テ春日
ノ社ヲ拜ス
文明四年八月七日後成恩寺春日社ノ参詣浄衣ニ衣ヲ重
ネ由ニ上タリ

将軍家

仁治元年八月二日七条ノ将軍鶴岡宮ニ参詣ノ時浄衣ヲ
着用セラル
應永十年三月廿八日勝定院将軍八幡宮参詣布浄
衣ニ蘇芳ノ袖ヲカサネラル
應永十六年六月十廿日同将軍同宮ニ参詣路次織物ノ小
直衣文相社頭ニテ指ノ浄衣紅ノ袴等ヲ改メ用ラル
永享元年九月二十三日普廣院将軍春日社参詣ノ浄
衣ヲ着用セラル

寛正三年二月廿九日 慈照院准后八幡參詣ニ備ノ淨衣
ヲ用ヒラレ侍ル ナリ

諸家

久安四年五月十日 台記ニ曰 禪閤天王寺ニ詣ス扈從ノ人々十
淨衣ヲ着用スト云フ是ニ支ナシ各布ノ淨衣ヲ
延慶四年正月廿七日 一院八幡御幸ノ供奉公卿新大納言
為兼按察使ノ大納言以下六人殿上人茂賢朝臣以下
九人上北面三人以上淨衣ヲ着用スト云ヘリ
永仁七年正月 二十四日 新院八幡御幸ノ供奉宰相中將
宗朝淨衣ヲ着用ス

應永十六年六月十五日 勝定院將軍八幡ニ參詣ノ時扈從
裏松大納言淨衣ニ黃衣ヲカサヌ帥ノ中納言北畠ノ中納
言同ノ淨衣殿上人教興朝臣資高朝臣以下十人淨衣
ニイロ〳〵ノ衣ヲカサヌ諸大夫後從朝臣淨衣ニ衣ヲカサヌ
後仲淨衣 但衣ヲカサヌ
永享元年九月二十日 普廣院將軍春日社參ノ日供奉公
卿万里小路大納言勸修寺中納言以下殿上人宣雅朝臣
以下諸大夫二人以上皆淨衣ヲ着用スルナリ

禮服

元朝賀即位或八菜園ノ使表ヲ受ル日是ヲ着御臣下

是ニ同シ今ニハ大祀大嘗會ニモ着用ノ由見エタリ終ニ着用ノ
例見及サル夏ナリ

天子礼服

玉冠 冕十二旒

或記ニ曰天子ノ御冠巾子櫛允人ノコトシタシ云山ニアラス
前後ニ御形男ヲ以テコレヲ立ル金ノ筋アリテ鬘ヲ押ス
金物ヲ以テホリチリハメ御巾子ノ上ニ一方物一枝ヲキク其
時形折敷ノ如シ男ヲ以テ是ヲツクル金ノ筋アリ一方物ノ四面ノ
端ニ玉ヲ立ル董アリソノ前後ニ玉ノヨウラクヲ垂ル各十
二旒ソノ頂ノ中央ニ日形ヲタツル董アリカタハラニ向フ水精
二枚ヲ以テ合セ作ルソノ中ニ三足ノ赤キ烏ヲタツル日形頂光
ヲ判ル

大袖

大袖ハ垂頭色ハ緋也備ノ文アリ日月星山竜等蟲宗彝
吹以上八章大袖ニアリ

小袖

小袖ハサケノヒ色大袖ニナナシ繡ナシ

裙

裳ノ下ノ色右ニ同シ繡ノ文アリ藻粉米黼黻以上四章ナリ
大袖ト合テ十二章ノ

聖武天皇天平四年正月乙巳大極殿ニ出ヽテ朝賀ヲウ
クル天皇初テ冕服ヲ着御
嵯峨天皇弘仁十一年二月詔ニ曰皇帝皇后ノ元服ノ制度コ
レヲ考ス今條ニ闕メノセス朕即位及ヒ元正ノ朝賀ヲウクルニハ
袞冕十二章ヲ用ヒシ皇太子ハ元正ノ朝賀ニ袞冕九章ヲ服
シ皇后ハ褘衣ヲ以テ元正ノ朝賀ヲウクル服トセヨト云ヽ

佩綬（二旒或本）　玉珮（二旒）　弓笏（笏頂方也）　襪（白地ノ錦紫ノ窠文）
舄（綿地金銀ノ飾アリ　皆ナシ）　此外草袍表袴以下尋常ノ御服ヲ
着御ノ次第
先尋常ノ襪　次錦襪　次大口紅　次袍袴

次表袴（浮線綾）　次褶（四章　次小袖（調ナシ上頭）　次大袖（八章闌アリ無頭）
次下帯（大袖ノ上ニ元ノ結テ前後左右ヲハリテカタムスブ）　次玉佩（左右二旒下ノ帯ニムスヒ付ル或説先褶次
玉佩ト　イヘリ　次玉冠（先尋常ノ冠ヲ着御ノ子ヲ枝トリ其上ニ玉冠ヲ着御ナリ）　次舄（皆ナシ）　次笏
藏人頭笏ヲ以テ候ス即位ニハ高御座ニ
着御ノ後関白傳ヘ献ス

皇太子礼服

冠　黄丹ノ衣　牙笏　白袴　白帯
深紫紗褶　錦襪　烏皮舄
以上皇太子ノ服ニハ四冕九章アリ

皇后礼服

大袖（青）　小袖（青）　褶（青）

大袖袴等ニ雉ノ形ヲ圖繪ス小袖ニ繪ナシ又頸領ノ袴裳ノ腰

親王礼服

冠 漆地ニ金ノカヅリ水精二顆琥珀三顆青玉五顆各冠ノ頂ニ交ヘ居ル皇八顆ヲ以テ御形ノ上ニ立ル紐ノ玉少顆ヲ以テ前後ニ立テ纓ノ上ヲ押ス其ノ教ハ青龍頸ノ上ニタヲル其ノ斛尾ハ上頭ハ下右ノ方ニ出テ左ヲカヘリミル

深紫衣 白キ袴 條帶 深緑ノ砂褶

佩綬 二流 玉佩 一流 牙笏 錦襪 烏皮舄

玉冠ハ四品以上 叔品別制有礼服ニオヒテハ一品同シ

諸臣礼服

冠 漆地金雕琢稲立顆緑玉六顆各冠ノ頂ニ交居ル但玉八顆ヲ以テ橘形上ニ立其脚正面ニ出向フ

深紫衣 白キ袴 條帶

深緑砂褶 佩綬 二流 玉帽 二流 牙笏 錦襪

烏皮舄

二位三位以下ノ冠毎位ニ別制アリ礼服ハ二位三位淺紫四位五位以下朝服ノ下ニミエタリ

武官礼服

武礼冠 淺紫襖 錦袴 將軍帶 餝以金銀

金裝横刀 策着職文 烏皮舄

近衛ノ大將外衛ノ督以下官位ニヨリ各聊 替リアルナリ

礼服着用ノ次第

元首烏帽理髮

北山西宮ノ説又カクノ如シ然ニ寛德資房卿ノ記曰舄ヲ然着具
ノ後烏帽子冠ヲキルトヱ而宮北山院文ニ省事物ノ儀ニカハケル然如
仁安実躰卿ノ云件ノ烏帽生ノ結ノ角形ノコトク皇ヲ差ルトヱ
次着大口尋常ノ大口也 次着袙
仁安中山内府ノ記ニ曰先袴次烏帽次小帷次大口次張単次
表袴トヱ袙ノ夏ヱエス如何次着衣袴例ノ表袴ナリ実躰卿
記ニ曰尋常ノ袴ヨリ今四寸ハカリ延ルコレニタカク結
フノ故ノ又大口又白袴トヱ此夏人ニヨルヘシ次着褶
北山抄ニ曰表袴ヨリ三寸是ヲ上ル資房卿記ニ曰二寸ア
ーリトヱ中山内府記ニ曰表袴ヨリ六寸引上ル人別ノ
諸ヲ以テ肩ニカクトヱ
次着小袖頸紙常ノ袍ノ如シ
資房卿ノ記ニ曰頸紙アリ例ノ如シ裳ヨリ二三寸計是ヲ
トル嘉兼堀川左府ノ記曰裳ヨリ七寸上ル中山内府記五寸
実躰卿ノ記三寸トヱ
次着大袖
資倶卿ノ記曰小袖ノ赤ヨリ三寸アーリ是ヲ上ルトヱ
中山内府ノ記二寸トヱ
次結引帯
北山抄引帯ノ由ヲシルス清家ノ記下帯ノ由

次結綬

北山抄ニ云乳ノ下綬ヲ結シテ下ヨリ返ス毋ノ平緒ノ如シ則
針糸ヲモツテ衣ニトチ付ル資房卿ノ記糸ヲ以テ綬ヲ
乳ノ上ニ結ヒテ下ヲ一ニ返ス平緒ノ如クニ垂ル長一
尺許ト云ヘリ

次付短綬

中山内府ノ記ニ曰短綬左ニ付ル実綱卿ノ記ニ曰短綬左
ノ方ニ付ル長一尺五寸許ト云ヘリ

次付玉佩

北山抄ニ云綬左ノ方ニ結フ玉佩ハ右ノ方少前ヘ寄テ
是ヲカクル右ノ膝アタル歩ノニシタカヒテ声アクラシト
云ヘリ

次着玉冠

北山抄ニ曰燈心ノ輪ノ上ニ冠ヲクハフ糸ヲ以テ結ヒ固フト
云ヘリ資房卿ノ記組緒ヲ以テ頸下ニ是ヲ結フ其餘長ク
垂ル中山ノ内府ノ記玉冠ノ組緒耳ノ後ヨリ頸ノ下
ニ是ヲ結烏帽上加輪北山抄ニ云二重軽重ニシタカフ
資房ノ卿記灯心ノ輪ヲ入ル三重里ヲ以テ是ヲ又ル実綱
卿ノ記烏帽灯心ノ輪ヲ入ル四重

次取笏

資房卿ノ記ニ曰次ニ笏ヲトルスヘカラク牙笏ヲ用ユ可然
ニ無ニ仍テ其意例ノ笏ヲ取ト云ヘ

次着錦襪

北山抄次第ニシルサス或記玉佩ノ着ノ後是ヲ着云ヘ

着烏皮舄夏

北山抄ニ云革緒ヲ以テ固ク結フ錦ノ襪有ト云ヘ資房卿記
ニ曰烏皮舄ヲ着ク但緒ヲ以テ固ク是ヲ結フト云ヘ

車

天子御輿

鳳輦

朝覲行幸等ノ晴ノ時乘御ル行幸ニハ大略鳳輦也其
躰金鳳御輿ノ上ニ立也諸社ノ行幸ニモ葱花ヲ用ヒ
ウル比春日日吉ノ行幸ニハ鳳輦

嘉禎四年三月廿八日此初度ノ春日行幸ノ御輿鳳輦
先例ノ由光明峯寺ノ日記ニ見エタリ

葱花

神夏ノ時是ヲ用ヒウル即位由奉幣ノ行幸ニ必葱花ヲ
用ヒウル大内裏ノ時ハ建礼門ニ行幸アリテ行ハル後三
條院治暦四年建礼門ナキニヨリテ神祇官ニテノ由
奉幣ヲ立ウル然レヨリ流例ト成テ神祇官ニ行幸ナ

尤之又神夏ニアラス又尋常ノ行幸ニモ祖例ナリ春日日
吉ノ外諸社ノ行幸ハ勿論葱花之其休葱花ノ形ヲ金
ニテ切テ御輿ノ上ニ居之之
永久二年十一月十四日八幡行幸葱花同月十八日賀茂行
幸同ク葱花ニ乗御也

腰輿

大嘗會御禊行幸太政官ヨリ河原ノ頓宮ニテハ鳳輦ニ
ニ御膳ノ幄ヨリ腰輿ニ乗御又此外宮中ノ間ニテ御
方違ノ行幸或ハ火夏地震ナトノ俄ノ行幸ニ乗御ア
リトヒニ侍リ

御方違腰輿ノ例

文治二年十一月十六日雨降御方違トシテ近衛府廳
屋ニ行幸官廳輿ヲ儲ケ然ニ源大納言通親卿雨ノ
間然ルヘカラサル由下知ヲ加フ仍更ニ鳳輦ヲ儲ケ已雨
ノ日腰輿ヲ用ルノ例ナシト云ク

内裏焼亡腰輿ノ例

永久二年八月三日大炊ノ内裏焼亡主上腰輿ニ駕シ院
ノ御所ニ遷御同四年八月十七日内裏焼亡主上腰輿
ニ乗御シタマヒテ院ノ御所ニ遷御

地震腰輿ノ例

元暦二年七月九日午ノ上ニ大地震アリ天下ノ諸人家ヲ
離レテ外ニ出ル主上腰輿ニ駕シ中嶽ニ辻御

大衆蜂起腰輿ノ例

安元三年四月十四日或記ニ云山ノ騒動ニヨリテ大衆下
洛スベシト云ヘ仍テ主上去ル夜ヨリ腰輿ニ駕シ院ノ御所
ニ渡御ト云ヘ

事ナキ時腰輿然ヘカラサル事

安元三年四月十三日主上院ノ七条ノ御所ニ行幸腰輿ニ
駕ス俄ノ儀ナリト云シ腰輿ニテ行幸希代ノ例ニ最不
可然由或記ニミエタリ

唐車

太上天皇皇后宮東宮等用ヒラル又摂政関白乗用ス
古ハ太上天皇摂政関白ノ外他人乗用ナキ歟元永二年
二月十二日中宮御方違ノ行啓ニ糸毛車イヅタ出来ス
唐車ヲ用ヒラル ヘキ由御タツネ中ノ中御門右大臣申テ
曰唐車ハ院并ニ執柄モチヒラルヘキ所ナリ后宮ニ用ヒテ
ハ終ニ例ヲミスト云 右府ノ日記ニミエタリ 天治二年八
月十五日或記ニ曰若宮二条殿ニ渡御車等遠江守宗
章朝臣調献ス唐ノ御車青色ノ糸ヲ以テ総ヲ作レ簾以
下青色ト云ヘ

或記云唐車晴ノ時是ヲ用ユ上檳榔毛庇并ニ腰ノ総同ク
檳榔毛ソノ余ハ採色ナリト云〻
上皇乗御
大治五年十二月廿六日院三條西ノ御所修理ノ後初テ
渡御唐車ニ乗御建久九年二月四日上皇八幡ノ御幸ニ
唐車ニ乗御貞和四年十二月十七日上皇御幸始唐庇
ノ車ニ乗御
女院 付后宮東宮
嘉禎三年四月十七日宣陽門院入内唐車ヲ用ヒラル
永元二年七月廿七日中宮行啓若宮同車唐車ヲ用ラル

康和五年八月廿七日立太子ノ日若宮唐車ヲ用ヒラル
祺園
天永二年十月十九日知足院ノ祺政賀茂詣ニ唐車用ユ
久安六年正月四日天皇元服法性寺祺政加冠トシテ参内
唐車ニ乗ル
兼安二年七月廿一日月輪殿下ノ記ニ曰松殿祺政ノ若公
女院ニ参ル唐車ニ乗ル
治承三年二月五日松殿ノ関白北政所参内ニ唐車ヲ用ユ
永享四年七月廿五日後福照院祺政任大臣ノ節會日
唐庇車ヲ用ユ

特軍家

明德三年八月廿八日相国寺供養ニ鹿苑院准后時義尤
大臣准后三ツ唐庇ノ車ニ乗用
應永二年正月七日日將軍太政大臣ノ拜賀ノ時唐車ヲ用
フル牛車ノ宣旨ヲ蒙テ今日始テ牛車ニ駕ス

糸毛

コノ車ニハ院后宮東宮内親王女御代摂政関白是ヲ用ユ又武
部卿一分百ヨリテ省ニ向フトキ庇差ノ糸毛ノ車ニ乗ルトヲヽ
久寿元年十月一日東宮鳥羽ノ南殿ヨリ内ノ田中殿ニ
行啓先例禅閤ニアル貞信公ノ青糸毛ヲメス今度院ニア
ル青糸毛ヲ用ヒラルヽヲヽ件ノ車故待賢門院中宮トシテ
ツヲニ出入ノ牛白川院ウツシ造ラルヽ由台記ニ見エタリ土御
門大納言曰貞信公ノ青糸毛執柄家ノ秘蔵ノ間白川院
造ヲフカトヲヽ

貞信公青糸毛車

輿 寸法如例 横榻 轅輪 円前以上金銅ノ金物有之 前後庇 青キ糸総有 上簾 青キ糸綱付給
糸毛ノ上ニ金銅ノ窠文付ル其間ニ唐艸ノ文ヲ付ル 簾 面青シ薄青ノ糸ヲ以テ竹ニ二キテ是ヲアム錬糸ナリ孔雀ノ尾ノ文ヲ又
フ縁ハウスアシノ和錦錬糸ノ平クミホリモノヽ金物アリ 下簾 青キ朱濃 裏青平絹カナモノアリ或記ニ云茜木キリトシルセリ
文有ノ竹又ヒアリ孔雀唐艸又所ヽ螺アリ長サ七尺二寸五分 畳 総綱瑞京錦 遣縄 唐織 引立筵ナシ 苫 東京錦
錬絹丸絡絡アリ 鞦 平皮是ヲ帖ム其上朱又リ 胸懸 円前香葉五 校螺 草崎
長一丈五尺 十六枚螺十八草崎六

面懸 以前香葉 立草 崎六 揚鵲足 金物総角但四ノ角ニ是ヲ掛ル緒有 青地ノ錦縁四方仗但アリ

康和五年八月 廿七日東宮立太子ノ後 初テ行啓ニ負信

公ノ青糸毛ノ車ヲ用ヒラル 知足院ノ関白時ニ左大臣ニ

テ是ヲ進スト云ク

久安四年十一月二日 台記ニ云 負信公ノ車ヲ賜フ南庭ニキ

ヒテ右大将トヒニ是ヲ見ル今案ルニ右ノ青糸毛車ノコトク

スヘシ

永治元年 月御禊代一ノ車 負信公ノ車ナリ 車朱

雀院ノ車ヲ用ユ然ニ后宮出車ノ料殿下ヨリ召サレ畢又

依テ斎院ノ車ヲ用ユ是又先例也其様庇差紫糸毛押

金窠文紫糸ノ巻簾 補有 同色ノ頭総アリ 埋間ノ半

畳 東京ノ錦ノ苫 赤革 歓香葉 棟総 但総同年三ノ

車 新院ノ車按察ノ大納言献之ス 其様庇ナシ紫糸毛押金銀窠文自

餘二ノ車ニ支ナシ

長元九年御禊女御代ノ車青ノ糸毛ノ庇差ノ車紫糸

毛庇アリ四ノ車紫糸毛庇ナシ

長暦三年四月九日后宮立后ノ後 初テ院ノ御所ニ入御

金作ノ糸毛ノ車ヲ用ヒラル

治暦三年六月十二日 東宮行啓糸毛ヲ用ヒラル

綱代

上御門大納言抑ニ日 牛車ニ庇ヲサシ或ハ連子有或ハ物見
ニ簾ヲ掛ル ハ摂政関白大臣大将是ニ乗ルトヲヽ今案スルニ
此外上白円前ノ又牛車ニ庇或ハ連子等ナキハ納言以下
用ユヘキノ仁平元年二月十六日 隆長元服 牛車ヲ用
牛車ノ文百千鳥亀物見ノ簾千鳥簾革青今度新造
ノ由父左府ノ記ニミエタリ

摂関

兼安五年四月廿七日今度 良通侍従拝賀 牛車ヲ用
嘉禎四年四月十日一音院関白元服ノ日参内ニ牛車ヲ用

諸家

建保四年七月 京極黄門季御讃岐ノ日 牛車ヲ用ユ
暦應三年八月 廿二日 右府 師尹ノ息元服ニ中院大納言
通冬彼亭ニ向フ牛車ニノル
貞和六年四月朔日 院ノ御乗ニ東宮大夫 実夏 牛車ヲ用

庇車

院皇太子摂関大臣親王是ヲ用ユ又半庇ナトヽ云車ア
リ牛車ノ庇ノ類ノ

両有牛車庇車

或記ニ執柄并太政大臣是ニ乗ル他ノ大臣是ヲ見スト
イヘリ其様屋形ノ上白キ牛車 円色ノ文アリ 鞦 庇ノ上円ノ白キ

個代（文ナシ四ノ角ニ折金物アリ）　袖口白ノ個代（深書シタテ文鞠ヲカク）　物見ノ下例ノ個代（文ト鞠）　物見ノ下例ノ個代袖ノ内立連子アリ（朱ホンキメアリ）其下例ノ連子底ニ朱ノ金木ヲカクル（墻リノカナモノナシ墻ニ黄土ヲ又ル）　廂ト物見トノアヒタノ内外ニ横連子アリ（朱ノ細面アリ角ニトニ折金物アリ）　物見ノ板（外ニ簾練色ハ遠山霞鶴ナトヲカク）　之板（小菱ノ後ヲ張テ四季ノ画ヲカク　左ノ前春ハ後秋石ノ三ヘ夏ハ後冬ニカラアヤ上緒草等ヲ不入）

下張（白色ノ紙ハクアリ）　簾（青但ノ糸上緒一ツ文藍草ノ縁文小鞠裏ノ縁ハ青キカラアヤ上緒州等文イレス）　物見ノ簾（錦糸黄ニカラ縁ホ前ノコトシ青地錦縁小之ニ校別但掛緒ニ三有）　畳（大文ノ高ヲヒ縁重畳）　下簾（青朱濃）

新状（諸総揚黄金物）

院御兼用例

大治二年三月十九日白川新造御堂供養ニ両院御幸廂ノ車御用車トニ〻

大治四年正月廿九日両院賀茂ノ社ニ御幸庇車御用車之〻

仁安元年十月憲仁親王之太子ノ日上皇御幸庇車ニ乗御

女院

嘉禎三年四月十七日鷹司院准后入内庇ノ車ヲ用ル

将軍家

康暦二年四月二十日鹿苑院准后大将ノ直衣始ニ個代庇ノ車ヲ用ル

嘉慶三年正月二日円淮后参内始ニ綱代ノ車ヲ用ウル
永安二年十二月九日普賢院将軍大将ノ直衣始ニ綱代
ノ庇ノ車ヲ用ヒラル

摂家

治承三年三月　宇治ノ一切経會ニ松殿関白白キ綱代ヲモ
千ユ

文治三年十一月廿七日高倉院第二ノ皇子着袴ニ月輪
ノ摂政腰結ヒトシテ参内ノ時庇ノ車ヲ用ユ嘉禎四年正
月廿六日四明寺任大将ノ召仰ノ時猪隈ノ太閤庇
ノ車ヲ用ユ

治承三年三月十五日執柄ノ北政所平野ノ社ニ参詣上
白ノ綱代ノ車ヲ用ヒ侍リシナリ
久寿二年四月五日東北院十種ノ供養ノ日宇治ノ左府
庇ノ車子息兼長師長半蔀ノ車ヲ用ル由ヒ

諸家

治承三年三月三日宇治一切経會ニ花山院太政大臣上
白ノ綱代ニ駕ス
貞和五年正月廿九日院御幸始中園相国綱代車ヲ用
半蔀
院摂政親王大臣大将是ヲ用ル之但納言ノ大将ハ差別アリ

其躰或泥ニ個代 棟ノ上物見ノ上下例ノ個代也文輪画 半蔀ノ白キ個代 文ナシ裏ハ小格子或記ノ例個代トスヽ 袖ハ白キ絢代 漆ヲ以テ文ヲカク 物見ノイタ ミイタ 下張スタヽ物見ノ簾畳鞦榻等個代ノ底ノコトシ 半蔀上ノ金物銅黄外ノ金物南戸ノ金物等黒赤ノ銅ノ散物内ノ金物共ニ而皮付栗形アリ 簾掛半蔀等ノ金物銅黄蒔禎

四年三月十二日 光明峯寺関白ノ記ニ曰前ニ言リテ外ノ金物ヲウタス家ノ流ナリ 故入道殿金等カクノ如シ 袖白個代ノ漆ヲ以テ牡丹ヲ画ク代ヽ家ノ例ナリ 法性寺殿或ハ袖檜ノ車ヲ用ヒ玉フ 并故 摂政右府等此説ヲ用ユトヽ

将軍家乗用例

元暦元年十二月九日 鎌倉ノ右大将 頼朝 先日院ヨリ玉フ半蔀ノ車 駕ヒテ院ニ参ル

摂関

安元二年三月廿日 月輪関白御賀ノ後日参内ニ右大臣ニテ半蔀ノ車ヲ用ユ

治承三年十一月十三日 童女御覧ニ月輪右大臣ニテ半蔀ノ車ヲ用ユ

毛車

太上天皇以下四位以上通用 非参議ハ榻ヲタテヌル由 西

宮御ニモエタリ　但太上天皇四位以上是ヲ用フト人ヘ
トモ庇半蔀物見簾以下ニツケテ各差別アル了也
檳榔ナキ時ハ菅ヲ用ル説アリ其揮簾ステヽ（縁浮線綾下）
簾（スハフ木濃）鞦（連着革鞦）畳（縁端）榻（大臣黄金物大将敬物納言以下黒金物但執柄家納言敬物大臣黄金物ナリ）

永治元年十月御禊女御代金作ノ檳榔ノ例ノ檳ニ金物ヲ用ルナリ青キ簾紫ノ下簾連着ノ鞦自余常ノ如シ

文明八年将軍家新調車當家ヨリ調進セル品目　録檳榔毛車箱（物見ナシ輦ヲアリ前後ニ高ランアリ）棟ノ表袖ノ表花右各檳榔ヲ掛（腰蓑アリ）簾（濃蘇芳ノ竹紫ノ綾糸錦縁裏ノヘリ紫ノ唐綾七緒ナリ大臣以下大将以上ノ差別ナシ）

下簾（スハフノ木濃納言以上是ヲカケル参議以下是ヲ用ヒス長サ九尺五寸表差ノ糸有一幅ニ三反三針サシナリ）鞦（平四）榻（親王大臣黄金物納言三位黒金物）遣縄（白布ナリ前後ナシ）畳（綾倚縁引掛延ア）

コレラウツ三所ニ長ノ芋テ一重ニトリテ中央ニ付ル別ノ緒ニテ牛ノ鼻ニコレヲツクル

将軍家

建久元年十二月二日鎌倉右大将（頼朝）直衣始ノ参内ニ檳榔毛ノ車ヲ用ヒラル

建武元年十一月十九日等持院将軍尊氏参議拝賀檳榔毛ノ車ヲ用ヒラル

應永十四年七月十九日勝定院将軍大将拝賀檳榔毛ノ車ヲ用ヒラル

康暦三年正月七日鹿苑院准后一位ノ大将ニテ節會參
勤ノ時此車ヲ用ヒラル
文明十八年七月廿九日常德院將軍大將拜賀新
調ノ檳榔毛ノ車ヲ用ヒラル
諸家
康治二年九月八日斎宮群行ノ日宇治左府太納言ノ大
將ニテ檳榔毛ノ車ニ乘ル
仁平三年閏十二月廿七日中納言ノ中將兼長拜賀檳
榔毛ノ車ヲ用ユ建保四年七月廿四日京極黄門季御
讀任ノ時結願毛車ヲ用ユ

曆應四年正月朔日中院ノ大納言參内毛車ヲ用ユ
檳榔庇
太上天皇棋政関白大臣親王等是ヲ用ユ
嘉禎三年三月廿六日近衛前関白兵仗ノ拜賀ニ檳榔
ノ庇車ニノル其躰上檳榔ノ庇ヨリ檳榔ノ絡アリ袖ノ上
連子唐花ヲ卍カノ毛ノ見ニ半蔀有蘇芳ノ簾内
下簾
將軍家
永享九年十月廿一日將軍家ニ行幸ノ日也仍テ普
廣院將軍時ニ左大臣ニテ行幸以前先參内時檳榔毛

ノ庇ノ車ヲ用ヒラル

摂関

天暦元年十一月十九日知足院摂政兵仗ヲ玉フ後初テ参内檳榔ノ庇ヲ用ユ青キ簾固青キ下簾ノ由ミエタリ

治暦四年二月十一日故摂政ノ二郎若公元服ニ月輪右大臣三ノ檳榔毛庇車乗テ彼亭ニ向ハル

文治三年二月朔日月輪摂政内府ヲ相伴テ院参摂政庇ノ車内府半蔀ノ車ニ乗ル

諸家

内言ノ大将関白ノ許ヲ受テ庇ノ車ニノルコト保建六年十二月九日久我右大臣大将ノ直衣始ニ法性寺関白ノ許ニヨリテ始テ半蔀ノ車ニ乗ルヨシ見エタリ

貞和四年十一月十日中園相国ノ拜賀檳榔毛ノ車ヲ用

八葉

土御門大内言ノ抄ニ白大八葉五倍長物見ハ極位ノ人大臣是ニノル然ニ近代多ク乗用ス不可然歟也トヲヽ或抄ニ曰院ノ御車ノ文内ハ大八葉袖ハ唐草上ハ白是晴ノ時ノ御車ナリ又大八葉ノ長物見褻ノ時ノ御車也トヲヽ親王長物見ノ小八葉一ノ人上ハ白袖ハ牡丹内ハ猫子ハ大八葉次ニハ小八葉ナリ是晴ノ儀ナリ又大八葉ノ切物見褻

ノ時ノ車ノ下ニ云シ又淺官外記史等ノ輩モ小八葉ヲ用ル十リ但
下簾ハ物見ヲ切ラサル丁ノ

院

建保四年四月十四日賀茂祭院參ニ御見ハ葉ノ車ニ乘御
貞永二年七月十七日上皇太政入道川原ノ閣ニ御幸ハ葉ニ
乘御貞和四年十二月二十日新院初テ八葉ノ クルマニ
乘御

摂家

正和三年閏三月九日光照院殿下院參ニ大八葉ノ車ヲ用
同四年二月十四日東宮初テ蹴鞠ノ時同閣白八葉ノ車ヲ
用ヒ給ヒリ
永享十年二月五日後福照院吉田社ノ參詣ニハ葉ノ車ヲ用
宝德四年三月四日將軍家花頂花遊覽ノ時大深金剛院ハ
葉ノ車ヲ用ル
長祿二年六月十一日將軍家着陣ノ習礼大深金剛院ハ
葉車ヲ用ル

將軍家

建久元年十二月八日鎌倉右大將 頼朝 上洛ノ後始テ參内
ノ時個代ノ大八葉ノ車ヲ用ル
嘉禎四年二月廿三日七条將軍 頼経 上洛ノ後初テノ參

内ニ八葉ノ車ヲ用ヒラル

康暦三年正月十三日鹿苑院准后時一位大将ニノ恒例

参内始ニ此車ヲ用ヒラル

永享三年十二月十一日普廣院将軍千時一位大将ニノ

新造ノ室町ノ亭ニ移後ノ時此車ヲ用ヒラレシ也

文安六年三月十一日普廣院将軍新造ノ亭ノ移後ニ八葉

ノ車ヲ用ヒラル

諸家

貞和二年十月九日風雅集竟宴ノ日中園相国ニ而尤大

臣ニテ八葉ノ長物見ノ車ヲ用ユ物見ヲ開テ藍葉ノ五

結ノ小スダレヲカクル内ノ方ニカクル

同三年二月晦日上皇天竜寺ニ臨幸ノ日同相国八葉ノ

車ヲ用ヒシナリ

嘉吉二年四月廿六日洞院ノ右大将拜賀ニ八葉ノ車用

宝徳二年七月五日将軍家直衣始ノ參内ノ供奉ニ花山院

中納言八葉ヲ用ユ倶倫代ニアラストニ〻同時三条中納言侍

宰相等八葉ノ車ヲモチユ

弁外記史物見ヲ切サル事

保元二年四月十一日御禊右中弁五位蔵人車物見ヲ切サル

由ニエタリ

仁安三年四月十五日祭右少弁宣方小八葉外記史物見ナシ

治承四年四月十五日祭ノ日小少外記中原貞親左大史大江盛景共ニ物見シキラス

藏人頭物見ヲ切事

治承四年四月十一日初斎院ニ外記史ノ車物見ヲ不切由見エタリ藏人頭ノ車物見ヲ切トヽシ

文車

四位五位ノ人用ル車之其躰個代ニ色ヽ簡文ヲカクトヽエタリ或ハ簡ニ個代屋形ノ上ハ霞惣ハ岩ニ松袖ノ透文ハ桐ノ立枝物見ノ戸ノ文ハツフ桐地ハ卅青ク丸簾五緒ハ浅黄革緒角ハ紅ノ糸ニテ是ヲ結フ口ノ脇枝ニハ左右ニ春秋ノ心ヲ色ヽカクナリトヽシ

久安三年四月二十日台記ニ云中将兼長朝臣正四位下ノ拜賀ナリ中将車去年ハ常ノ個代ヲ用ユ今日初テ檜個代ヲ用ユ文ナシ

同年十月廿六日日記ニ師長昇殿ノ時個代ノ車其文籍ニ小鳥トヽシ

文安元年十一月二十二日大炊金剛院ノ記ニ云頭中将公忠朝臣貫首ノ拜賀ニ来文車ヲ用ヽシ

宝徳三年六月廿六日将軍家初度ノ院参供奉殿上人
頭言朝臣忠富朝臣永継朝臣以上文車ニノル
長禄二年正月十六日公継卿大納言ノ拝三前駈ノ殿上人
散国朝臣公胤朝臣文車ニノル

餝車

餝車トハ風流ノ車ノ夏ノ賀茂祭ノ使或ハ御禊ノ前駈
或ハ見物ノ車風流ヲナス
治暦三年四月二十一日山槐記曰賀茂祭近衛使ヲ将
頭家朝臣ノ車 車當色ミナクヌ師ノ風流ヲ用 個代 赤地ノ錦ヲハル上ハカリナリ 色紙形
色ミノ錦ヲ押ス上ヲ 物見 清キ玉ヲ以テ石畳ノカタヲ貫テコレヲ掛ル但 物見下
下ノ方一文字ノホトニキアクル

地ニ銀薄ノ花ヲソノ上牡丹唐艸ノ文ヲヌカク 付青ノ燕子以テ頸頷ノ
文ヲヌカク 亀甲ノ文ニ 付地ノ錦ヲ以テ劍形ヲスル帳帷ヲ横スナリ
前袖 左ノ方ニ殿上人ノ直衣ヲ着テ立タルカタヲ彫透ス 後袖 左ノ方
右ニ童女ノ黄紅葉ノ衣着テ立タル形ヲ彫透ス
紅葉ノ薄様前トフンメノ唐花ヲ
ス右ノ方ニハ衛府ノ蔵人青イロノ袍ヲキテ透彫ヲサレテ立タルカタヲホリ透
立板内 唐画ヲヌカノ 縁ハ蒔絵 榻見 前簾 貫玉御レンヲ右ノ方ノ上ノ方スケカヘ様ニ
帖一板ヲツクルソノ縁蒔ヲソノ上ニ コレヲキル右ノ方ノ下ノ方高ライノ
東京錦ノ苗ツクル五節所ノ簀子ノ躰 後簾 貫玉御レン横ナリ 右ノ方ニ金銅
鞦 村濃紫ト青ノ葉アリ 遣縄 櫨ノ白ノキ交葉総アリ ノ帽額アリ キ出 鞦紅白五
ヘトモミナコノルイ〻最風流ナリ 右餝車色ミノ品アリトイ

板車

西宮抄ニ曰上下昼ヲ通用ス近代兼用ノ人ナレトモ
同抄ニ下簾古ハ三位以上昼ヲ掛ル近代納言以上昼ヲ用

簾縁織物ヲ用ユ近代中納以下皆色革ヲ用ル由見タリ
右車ノ夏粗所見ノ分記シ侍リ又車ニ乗テ宮中ニ入夏ハ宣
旨ヲ蒙テ乗侍ルコトナリ牛車ノ宣旨ヲ蒙テハ車ニ牛ヲ
掛ナカラ待賢門ヲ出入シ侍ルナリ又輦車ノ宣旨ニテハ
延喜式ニ曰凡輦ニ乗テ内裏ヲ出入スル妃ハ書司ヲカキル
婦人及内親王ハ温明殿清涼殿ノ後ヲカキル命婦三位ハ兵
衛ノ陣ヲカキル但嬪女御及孫王大臣ノ嫡妻ハ輦ニ乗テ
兵衛ノ陣ヲカキルトヽ
又西宮抄ニ曰親王大臣ノ中宿老ノ人コノ息アリ女親王女
御尚侍ハ出入コトニ蔵人奏聞ヲ任テ宮門ノ吉上ニ仰

スト云ヘ延喜式ニノスルトイヘトモ毎度仰ルトヽエタリカタノ
如ク上古ハ宿老ノ人宣旨ヲ蒙リ宣旨ノ上ニテ親王大臣ハ春
華門ヲカキリトス當時里内ニ准スレハ左衛門ノ陣ニアタル
然ニ近来ハ猥興ヲ宮中ニ舁入ル輦侍ルナリ
鞍具足
西宮抄ニ曰大嘗會公卿モ唐鞍四位五位和鞍杏葉ヲ付
ル尋常行幸五位以上和鞍唐尾ヲ結フ近衛ノ次將移
鞍唐尾トヽ
唐鞍
永治元年御禊日宇治ノ左府唐鞍ヲ用ユ唐鞍ハ子雲

珠鈴頸総ヨリ入道殿ヨリ下シ給フ摂政モトヨリ駈馬支度
ノキコノ唐鞍ヲモチヒ給フトミヘタリ
治暦二年十月晦日コノ日良直春日祭ノ使ノ時唐鞍ヲ用ハ
子雲珠鈴頸総蘇芳ノ手綱紫ノ村濃ノ差縄総アリ
鏡杏葉
建暦二年十月廿八日御禊行幸ニ光明峯寺摂政時ニ内
大臣ノ大将ニテ供奉唐鞍銀面藤頸総同雲珠鏡杏
葉（吉下巻物錦）尾袋復鈴
和鞍
水精地黄地銀地蒔画地螺鈿地次下皆和鞍ナリ其
品アヽタアリ粗尤ニ注シ侍ルナリ
水干鞍
観應二年正月廿四日持明院殿ニ行幸新大納言水
干鞍ニ平総鞦ヲ用ユ
文和二年九月廿二日三上石山寺ヨリ還幸供奉ニ洞院
大納言実夏兼松殿中納言等水干鞍ヲ用ユ
康正二年三月廿七日慈照院准后八幡参詣ノ引馬同
水干鞍ヲ用ヒラル
水精地
天永三年春日詣ノ日中納言中将是ヲ用ユ

治承二年十月晦日春日祭ノ使右中将良通引馬鞍水
精地竹豹ノ鞍紫朱濃ノ鞦スハフ従ノ手個菊ノ差縄
青白スハフ白アリ
各一筋歟アリ
銀地
天永三年中納言ノ中将春日詣ノ日引馬ニ是ヲ用ユ
建久六年五月廿日右大将頼朝天王寺参詣太子聖霊
ニ引進セラル馬銀鞍ヲ置トカヽ
嘉禎四年三月廿八日春日行幸ニ左大将四条寺銀地鞍
文孔雀ノ丸竹豹ノ切付紫革鞦(しりがい)蠪鐙連着鞦差縄
鏡鞍
保安五年二月十日上皇雪見ノ御幸ニ御騎馬ノ鞍鏡
地縁ニホリモノアリ台長ノ鐙豹ノ切付竹豹ニ連着鞦スハフ従ノ
御手個等
久安五年十月十一日日吉ノ行幸ニ三位ノ中将兼長鏡鞍
鏈ノ伏組アリ
治承三年四月廿一日賀茂祭近衛役右少将顕家引
馬鏡鞍鞦櫨朱濃或ハ村濃泥障金伏輪ヲ掛ル十六文ノ差縄
葉懸鞍覆雑物アリ
應永十四年三月廿三日新女院ハシメテノ入内ニ福照院
関白時ニ内大臣ノ鏡地ノ和鞍ヲ用ヒシ

螺鈿

保安五年九月廿一日 初斉宮御禊前駆中将宗良朝臣

鞍（黒地ノ螺鈿） 大閤下鞍敷ノ切付連着ノ靴トヲヽ

治承五年四月十日 行幸ニ右大将騎馬鞍 緑螺鈿切付手縄（緋）

蒔繪

永治元年十月御禊日前駆廿人五位十六人ハ蒔画鈿ノ

鞍 鹿皮ノ切付同泥障小袋ノ靴檀染ノ手綱トヲヽ

文治三年十一月十四日後徳大寺左府記云今日賀茂行

幸ニ少将供奉平文ノ移鞍ヲ用ユトヲヽ

黒地

寿永二年二月廿一日朝覲行幸後京極摂政時ニ中将

ニテ騎馬黒地鞍小袋ノ下鞍紫綾ノ手綱ヲ用

仁安二年九月廿一日 初斉宮入ニ五位以上黒地ノ倭鞍

楚鞍（杏葉ヲ付ル） 結唐尾

建保二年三月廿六日 京極黄門記ニ曰春日ノ行幸

少将為家黒地ノクラヲ用ユ

黄地

治承元年十二月十七日 運華王院堂供養ノ行幸ニ後

京極摂政時ニ中将ニテ騎馬 鞍（黄地） 鐙輿切付小袋 大滑

（紫革ノ縁） 手綱（紫綾） 表腹帯田木柳差縄（麻木ヲ交） 鞍覆ヲ

同三年正月二日朝覲行幸ニ支ナシ　三位中将鞍黄地竹
紗ノ鞦蘇芳ノ結手個
亀甲地
大治五年朝覲ノ行幸ノ日少将顕長　亀甲地ノクラヲ用ユ
鉢鞍
野望ノトキ是ヲ用ユトミエタリ
黒漆鞍
治承四年五月四日近衛府ノ荒手結騎射ノ物見ノ
内ニ鞍二十具　橋黒漆　熊皮ノ切付カ革アリ　下鞍ナシ　無文　鞦腹帯
并交等アリ　鼎　鞦等不具

元永二年七月三日侍従宗成因幡ノクニ下向門出ノ日
黒地ノ鞍ヲ用ル
餝馬鞍
長元九年御禊ノ公卿餝馬銀面尾袋頭綱雲珠杏
葉等相具治暦元御禊諸卿ニナ餝馬ニノル菖蒲形
銀面唐鞍杏葉雲珠頭綱常ノコトシトヽ
行幸ニ和鞍ヲ可用歟
玉葉治承五年六月十日月輪殿下ノ北面行幸ニ大将
縁螺鈿ノ鞍ヲ用ユ或ハ蒔画　梨地素文蒔画トヽ　ヲ用ヘキ伝ナリ
然ルニ但新調ニアタハス相持ノ人ナレ依テ常ノ沈ニ

行ニ緑螺鈿ヲ用ルトコロ也 猶蒔ヱヲ用ユベキ歟ト云々

土御門天納言抄ニ曰行幸ニハ緑螺鈿ヲ用ヘシト云々然トイヘヒ近代或ハ鏡鞍或ハ二キヱ彼是用ル処也ト云々

切付

二條家

大染金剛院ノ記ニ曰水豹四位以上用ユ亀皮五位是ヲ用フト云々下鞍同物歟治承元十二月十七日蓮華王院御堂供養ノ行幸ニ中将水豹ヲ用ユ嘉禎四年三月廿八日春日行幸ニ左大将竹豹ヲモチユル也康正二年三月廿七日慈照院准后八幡詣ノ引馬ニトラノ皮ノ切付ヲ用ユル由ナリ

鞍覆

弾正式ニ曰大臣以上ノ鞍オホヒハ浅紫参ノ浅以上ハ深緋諸王ノ五位以上ハ緑也諸臣黄色六位ハ用ル故ヲ得ストヲ云々

又キノクラオフヒ或ハ薄物又ヒアリ天永三年春日詣中納言ノ中将藤木ノ浮線綾ヲ用ユ應永十四年三月廿三日新女院ノ入内ニ福照院関白時ニ内大臣ニテ青地ノニシキヲ用ユ康正二年三月廿七日慈照院准后八幡参詣ニ豹ノ皮ノクラオホヒヲ用ヒラル

泥障

伏輪花筏ノ人皇ヲ掛ルアルヒハ黄糸ヲ以テコレヲ但押ト

又熊ノ皮ノ泥障ハ五位以上ニ許シ用ヒル又ハ聽ルスヨシ障正式
ニミエタリ御幸及春日詣ノ日地下ノ前駆泥障ヲ用ヒ、
サル由ミエタリ又棋政集用ニ泥障ヲ指サル由光明峯寺
ノ記ニミエタリ治承三年二月廿四日石清水臨時祭ノ使
右少將隆房朝臣泥障黄袒伏輪ヲ用ヒ同年四月廿一
日賀茂祭近衛使少將顕家金伏輪泥障ヲ用ヒ文治
五年六月六日院ヨリ石大將 頼朝ニ賜ル御馬白伏輪ノ
泥障トミヘ
文和二年九月廿二日主上石山寺ヨリ還幸ノ日同院大
納言実夏熊ノ皮ノ泥障ヲ用ヒ金伏輪ハ浅官ノ人ニ
用ヒヘカラサルコト天永二年中右記ニ曰賀茂祭ノ使泥
障伏輪ヲカクル件ノ夏大臣殿仰ニ曰後三条院住吉詣
ノ御馬伏輪ヲカクル旧院百川詣又カクノコトシ此前ニ多
此夏ヲ不見トミヘ

鐙

金銅蟹石長半舌等也唐鞍ニハ舌ナシ只輪ハカリト見
エタリ近代踏ヨキカタメニ舌フルヨシ土御門大納言抄ニ
エタリ
保安五年二月十日雪見御幸上皇舌長用ヒル
嘉禎四年三月廿八日春日御幸ニ花大將蟹鐙ヲ用ル之

轡

金銅鏡應永十四年二月廿三日女院入内ニ内大臣鏡轡ヲ用ル也

手綱

土御門大納言持ニスハフ從公卿皇ヲ用ユ四位以下棟從ニ

保安五年二月十日雪見御幸ニ上皇スハフ從ヲ用ヒラル

久安五年十月十一日吉行幸ニ三位中將スハフ用ユ治承元年十二月二日運筆王院御堂供養行幸ニ後京極摂政時ニ中將三ノ紫從ヲ用ユ應永十四年三月廿三日新女院ノ入内ニ内大臣棟從ヲ用ヒラル

宝德四年三月廿日將軍家東山花遊覧ノ時大條金剛院殿白ノ前駆月輪中將家輔朝臣從ノ手綱ヲ用

鞍杏葉ヲ付ル

陣正式ニ曰參議以上検非違使ノ別當以下府生以上衛尉ヲ付ル古又ヲ憚リ又六位以下ハ鞍ノ鞦從連着ヲ用ヒサル日ニ云エタリ長安五年朝覲ノ行幸ニ三位中將紫朱濃ノ連着ヲ用ユ

仁平四年春日祭ノ上卿中納言隆長ノ乗替用ル連着ヲ用ユ

天永三年春日祭ニ中納言中將畝ノ連着ヲ用ユ

観應三年住吉ニ行幸ノ日宰相中將公冬卿靴ヲ用ユ
此ノ外楚靴赤滑ニ朱塗リナトアルヘシ但楚靴ハ杏葉ヲ
付ル時用ユトミエタリ又康治元年十月十三日知足院関白
イハレシハ楚靴ハ様アル歟也六位是ヲ用ユ又我ホカ様ナル
者モ物語ナトニハ用ル也トヽ

鞭

蒔絵壮年ノ人紅梅ノ檀紙ヲ以テコレヲ巻ク老人ハ白キ
檀紙ヲ以テ是ヲ巻也
治承元年十二月十七日蓮華王院行幸ニ中將蒔絵ヲ用
ヒタリ

差縄

白村濃并交櫨紋スハフ紋菊等也公卿師差縄四位
以下佐差縄也
大治五年朝覲行幸ニ少將頼長萠黄匂ヲ用ユ
治承元年十一月行幸三位中將欵冬ヲ用ユ
天永三年春日詣中納言中將紫村濃ヲ用ヒ侍ル也

有職抄終

本云此書者禁中ノ禮義朝政有職ノ根也ヽし今三光
院以自筆ノ本書写之畢深可令秘密者也殊此類無于

他ニ了堅以誠言字之
貴人公子以堅誠言為所望ニ誠言貴神威至于子〻
孫〻更不可他傳依而為ニ末代之子孫令加奥書畢

寛永十九年八月二十二日　　縣主季芳

時安永五歳次丙申臘月下旬書寫焉

此書全部七冊未知何人撰頗抄出有職之要領最深切有所発明矣惜哉闕首一卷一本莫據
繕補姑謄写残本備捜覧耳文政十年戊子林鐘七日朝

開戸藏書